

## アンティーク紀行

横澤 宏一

旅に出ると、できるだけ現地の骨董屋（アンティーク・ショップ）に立ち寄るようにしている。その土地の歴史を物語る小物などがあると喜んで買って帰る。かくして身の回りは世界各地で買い集めた怪しげなものであふれ、私は幸せなのだが家族の評価は芳しくない。パリでは17世紀初頭のセヌ川の流域図を買って帰ったが、当時小学生だった娘に「そんな古い地図、今は使えないよ」と言われてしまった。

### はじめに一北大の一室にて

12年前に会社員（日立製作所）を辞め、北大の一隅にささやかな研究室を構えている。気がつくくと大学の部屋の中にも研究と関係ない品々が増えている。一番古

いものは中国の前漢時代の青銅製の鏃（やじり）である。当時中国にはまだ鉄の量産技術はなかったらしいから、話は合っている。それにしても「四面楚歌」などの故事で知られる項羽と劉邦は、こういう青銅製の武器で天下を争ったのである。次に古いものは古代ローマ時代の4枚のコインである。1世紀と2世紀のものは銀貨、3世紀と4世紀のものは銅貨である。私が買える程度の値段でこれらが売られているということは、現在でもそう珍しいものではなく、それなりの数がアンティーク・マーケットに出ているということである。2世紀頃までは銀貨が、それ以後は銅貨がローマ帝国で大量に製造され、流通していたことが想像できる。主要通貨が銀貨から銅貨に替わったことは、



ヴェスパシアヌス  
（在位 69-79AD）  
銀貨



ハドリアヌス  
（在位 117-138AD）  
銀貨



ディオクレティアヌス  
（在位 284-305AD）  
銅貨



コンスタンティヌス  
（在位 306-337AD）  
銅貨

3世紀に鉾山のあるダキア属州（現在のルーマニア）を失ったローマ帝国の衰退を連想させる。コインには当時の皇帝の横顔が刻まれている。1世紀、2世紀の皇帝の横顔はリアルで、確かにこんな人がいたのだなと思えるが、時代の変遷とともに平板的になり、4世紀初頭のコンスタンティヌスの横顔は初期のキリスト教絵画を思わせるほど様式化され、生気がない。のちのルネッサンス芸術を知る現代人の目でみると、これもまた、文化的衰退を見る思いがする。何しろルネッサンスは古代ギリシア文化やこれに学んだ初期のローマ文化の復興を目指したのだから。

### スース（チュニジア）

北アフリカは2世紀にローマ帝国の属州になるが、それ以前にはカルタゴが栄え、歴史の古さはローマ帝国に劣らない。チュニジアは地中海に面した北アフリカ諸国のちょうど真真中に位置し、スースも歴史のある町の一つである。その郊外にある考古学博物館を訪ねた。残念ながらその日は休館日で、閉まった扉に貼ってあるアラビア語の張り紙を眺めていると、近くにいた男に話しかけられた。博物館は休館だが、その辺の発掘現場は見る言えることができると言っているらしい。この博物館は発掘現場に建てられており、出土品を展示しているのである。ついでいくと、発掘現場のはしごを降り、何か所か

の現場を見せてくれた。現場によってアンフォラ（ワインやオリーブオイルを入れる先の尖った素焼きの大甕）がたたくさん土に埋もれていたり、みごとなモザイク画が半分発掘されていたりする。男は現場ごとに熱心に説明してくれるのだが、残念ながら何語で話しているのかすらわからない。モザイク片が大量に埋まっている場所では2～3片拾って私にくれた（おいおい。これは文化財の一部ではないのか？）博物館が閉まっていたのは残念だが、発掘現場を身近に見る経験のほうが貴重である。満足したので帰り際にチップをはずむとともに喜んでいた。後から思えば、男は博物館の休館を知らずにやってくる観光客を待ち受け、発掘現場を（こっそり？）案内してチップをもらっているのではなからうか。それにしても現場では熱心に説明をしていたから、もしかすると本当に博物館の職員だったのかもしれないが。

骨董品には定価がなく、値段は交渉次第である。この国は、骨董にかぎらず、ほとんどのものが交渉価格であった。最初は戸惑ったが、慣れて考え方がわかってくと逆に合理的に思えてくる。価格交渉とは、売りたい側がいくらで売りたいか、買う側がいくらなら買ってもいいかの妥協点でその時点の適正価格を決める作業である。そういう意味ではウォール街や兜町と同じであろう。大きく違うの

は、ここには売り買いする商品がその場にうずたかく積まれているという点である。スーク（市場）で地元の人の3倍の価格を提示されても怒ってはならない。いつでも来ることができて底値で買える地元の人と、明日の朝、日本に帰り、ここには一生来ないかもしれない観光客では緊急性が違うのだから、値段が違って当然なのである。適正価格を決める作業である以上、値切り倒せばいいというものではない。その商品にそれだけの価値があると思ったら、その値段で買えばよい。予想外に高く売れたとすれば、売り手は嬉しいだろう。商品を作った職人のところに行つて、いい値で売れたからもつと作ってくれと言うことだろう。職人も張り切り、いいものを作ろうと工夫を重ねるかもしれない。それを見ていた息子が父親を見直し、仕事を手伝い始めるかもしれない。かくして技術が伝承されるのである。

ジャスミン革命の後、チュニジアがどうなっているのか気がかりだが、私が訪問した当時は治安もよく、人々は温厚で人懐こく、快適な旅だった。フランスの旧保護領であるが、イスラム教国である。イスラムの戒律はあまり厳しくないらしく、お酒も飲める。女性の服装も比較的自由である。そのためか、戒律の厳しいイスラム教国と欧州各国、双方の保養地になっている。キリスト教とイスラム教が交差

する十字路口であり、プールやビーチでは目だけを出した黒いニカブ姿とカラフルなビキニ姿が交錯する不思議な光景を目にすることになる。

## パリ（フランス）

パリのアンティーク街と言えは蚤の市である。シテ島をパリの中心とすると、北方にはクリニャンクール、南方にはヴァンプ、東にモントルイユがあり、3大蚤の市と言われる。シテ島からちょうど同じくらい離れていて、地下鉄で行くとどれも30分程度かかる。しかも3つともパリ市内を巡る環状高速道路に隣接している。なぜだろうか？

物品の積み下ろしが楽な高速道路沿いにマーケットができたのだろうか。それは違う。これらのマーケットの歴史は高速道路より古いのである。では、これらの蚤の市をつなぐように高速道路を建設したのか？いくら何でもそれはあるまい。以下は私の推論である。調べてはいないが、たぶん大筋では合っていると思う。

都市に高速道路を建設する場合、用地の確保が難しい。個別に土地を買収するのはまず無理で、日本の首都高のように既存の道路や河川の上を通すか、あるいは何か公共の跡地を使うしかない。都市を巡る環状の空き地は何の跡地であろうか。間違いなく、これはかつて町全体を囲んでいた城壁の跡である。3大蚤の市は、

かつて城壁、というより城門の外側に発展したマーケットであったに違いない。なぜ城門の内側ではなくて外側かというと、城壁の内側は町の行政区域だからである。

町の主要な機能の一つは、マーケットを提供することである。町の真ん中にはマーケット広場があり、広場に面して市庁舎と教会が建てられているのが、ヨーロッパの町の基本構造である。マーケットが開かれる日には担当役人が立ち会い、万一に備えて警備兵も待機する。そうやって安全に売り買いができるわけだが、代わりに役人や兵士を賄うための税金を払わなければ居住や出店ができない。そこで税金を節約するために、多少のリスクを覚悟で市外のマーケットが自然成立する。城門脇であれば人通りも多かったことだろうし、税金分だけ市中より安く売ることもできたろう。その後、町が拡張して古い城壁が無用になり、邪魔にもなるので取り壊されて環状道路が建設されたのである。いかがだろうか。要するに3大蚤の市は、免税店街だったのである。

さて、冒頭に述べた17世紀初頭のセーナ川流域図である。セーナ川とその支流が川岸の諸都市とともに記載された銅版手彩色の古地図で、今は使えないかもしれないが、十分に美しい。これを買ったパリのオールド・プリントの専門店には同じ時代の似たような古地図の在庫が5～

6点もあって、当時大量に印刷されたことが想像できる。それだけたくさん印刷されたのなら、いかに美しくともぜいたく品であるはずはなく、実用品である。では、何に使われたのか？おそらく当時の交通路は陸路より川であった。つまり流域図は現代で言えば道路地図だったに違いない。川の合流点は三差路や四差路であり、ノードやハブに相当し、必ず大きな町がある。そして、パリがある。パリは最も大きな支流であるマルヌ川との合流点直下であり、手ごろな大きさの中洲(シテ島)もあって船の通行も管理しやすい。セーナ川流域全体のボトルネックに位置するその立地は必然であり、北フランスに広がるセーナ川流域経済圏を掌握できる。

ちなみにパリの城壁は2度にわたって拡張されていて、17世紀当時は第2期の城壁が市域を定めていた。現在、例の環状高速道路が巡っている場所に相当する。クリニャンクールなどの免税店は、この頃に繁盛していたことだろう。

## タリン (エストニア)

エストニアはバルト三国の中で最も北に位置する。フィンランド湾をはさんだ対岸にヘルシンキがある。ヘルシンキと首都タリンの間は1日に何本もフェリーが行きかい、日帰りができる。フェリーは5万トン級の豪華客船で、片道2時間とはいえ国際線の船旅になる。船内は免税

店が充実していて、物価の安いタリン市内や、船内の免税店での買い物を目当てにヘルシンキから往復する人も多いらしい。

タリンの旧市街は今でも城壁に囲まれている。城壁を取り壊さず、少し離れたところに新市街を作った都市の一つである。城壁内の景観も保存され、どこで写真を撮っても絵本のように美しい。旧市街にある市立博物館の3階には説明員の老人がいて、エストニア独立までの苦難の歴史を語って尽きることがない。エストニアが独立を失ったのは700年前にさかのぼる。デンマーク軍との会戦で緒戦は優勢だったのだが、突如天から旗が舞い落ちてきたのを機に戦局が逆転し、大敗してデンマークの支配下におかれたのだという。デンマークでは同じエピソードが建国神話になっており、落ちてきた旗の意匠は現在のデンマーク国旗に受け継がれている。エストニアはその後、スウェーデン、ロシア、ナチスドイツ、ソ連などの支配を経て、ついに1991年、悲願の独立を果たした。老人は独立の記録映画を見ると盛んに勧めるのだが、一通り見るだけで2日かかると真顔でいうので固辞した。「たった2日です。我々は独立を回復するまで700年かかった」と老人はどこまでも真顔である。

旧市街の中心にはマーケット広場に面して壮麗な市庁舎と教会があり、広場の

一角の建物に世界最古の一つという薬局（ヨーロッパには世界最古を称する薬局がいくつかあるが、古すぎてどれが最古かわからないらしい。発展して大学の薬学部や医学部になっているところもある。）が入っている。同じ建物には骨董屋が何軒かあるので、その一軒に入ってみた。アイコンや食器類と一緒に旧ソ連軍の装備までが雑多におかれている小さい店であった。主人は屈強そうな親父である。中国人かと聞くので、日本人だと答えると寄せ書きのある日の丸を取り出した。第2次世界大戦中に日本軍の兵士が持って出征した日の丸で、墨痕鮮やかに「武運長久」と書かれている。私に見せたのは、その意味を聞きかかったからであった。駐在武官の将校ならともかく、応召兵がこの辺まで来たとは思えない。どこで手に入れたのかと聞くと、アメリカ人からだという。持ち主であった中村という兵士は日本には還らなかつただろう。しばし戦争の話をした。ソ連時代が長かつたせいとか、エストニア人は日本に好意的である。ウオッカを飲むかというので、2人で一気にあおった。乾杯したウオッカは一気に飲み干すのが作法である。

店内を眺めていると、120年前の日本製という金属製の小さいカップを出してきて私にくれた。底にメイドインジャパンの刻印がある。それはいいが、表面の浮彫はニューヨークの観光名所である。親

父は意味ありげに笑っている。なるほど。120年前、アメリカは当時人件費の安かった日本に自国の土産物を外注していたのである。当時の日本製品の国際評価は廉価・低品質であり、価格の安さを武器に世界に販路を広げた。はるばる行ったニューヨークでそれと知らずにメイドインジャパンの土産物を買って帰った日本人もいたことだろう。このカップはエストニア人が買ったのだろうか。120年がかりの世界一周の旅から、様変わりした日本に里帰りさせてやることにしよう。

もう1杯ウオッカを飲もうというので、やむなく受けて立った。こんどはグラスになみなみと注いだ。乾杯して親父から0.5秒遅れで飲み干した。帰り際にその日の丸の旗は大事にしてくれという、胸に軽く手をあててもちろん「I promise」と答えた。一旗の旗のために700年間独立を失った民族である。エストニア人が国家や国旗に対して抱く思いは重い。考えているうちに酔いが回り、あわやヘルシンキ行き船に乗り遅れるところであった。出航は午後9時。北欧の夏の太陽は水平線をかすめるように高度を下げ、夜10時前、漸く北の海に没した。

### 終わりに一台北（台湾）

台北には必ず立ち寄る骨董屋がある。店舗はビルの1階と地下1階にあり、地下の鍵のかかる小部屋には博物館級の逸

品が（もちろん高すぎて買えはしないが）並んでいる。その日も地下に降りていくと、珍しく主人がおり、奥さんや品のいいヤングミセス6～7人と一緒にテーブルを囲んでいた。私立小学校のママ友とのワインの試飲パーティだという。ご主人はアメリカ人で、初対面である。よかつたら一緒に、と言われ、一旦は遠慮したが、重ねて誘われたので加わらせてもらうことにした。どうも英語が得意な人ばかりではないようで、私か加わると喜ばれた。主人の話では、現在、ヨーロッパにある葡萄の木も多くは、実はヨーロッパ原産ではなく、ヨーロッパの葡萄が疫病で壊滅した後、アメリカから移したものだという。で、試飲しているのは東欧に残っていた貴重な原産木のワインなのだそうである。礼を言って辞去しようとする、今からシャンパンも開けるので、20分だけ待てという。

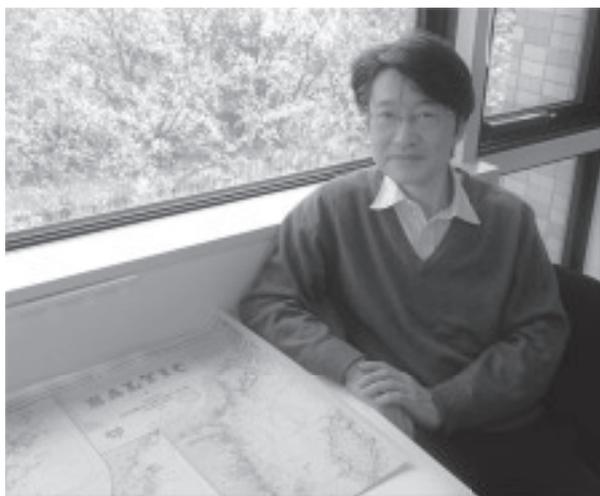
そもそも台湾人はあまり酒を飲まない。ミセスの一人が「男の人は強い酒が好きなのにどうして弱いシャンパンなども飲むのか」と聞くので（ちょっと不思議な質問だった）、女性と一緒にの時は連れに合わせでシャンパンやカクテルを飲み、忘れたことがあるときは一人で強い酒を飲むのです、と答えておいた。奥さんが中国語に訳してくれ（奥さんは台湾人である）、それなりにウケたようだった。骨董屋で酒をふるまわれる機会が度々あるのは不

思議な幸運だが、骨董はたとえ正札がついていても価格交渉が必ずあるので、どんな国であろうが店の人と話をしないわけにはいかないのである。

---

旅に出ると、できるだけ現地の骨董屋

(アンティークショップ)に立ち寄るようにしている。店の人や居合わせた見知らぬ客との会話で、思いがけずその土地の歴史が立ち現れる。そこでそれを具象する小物の一つ連れて帰る。たとえ家族の評価が低くとも、悪くない趣味ではあるまいか。↩



よこさわ こういち

1984年 北海道大学理学部卒業卒寮

北海道大学大学院理学研究科修士課程を経て(株)日立製作所に入社  
在職中に北海道大学大学院工学研究科博士課程に社会人入学

2007年 北海道大学医学部保健学科教授

翌年 北海道大学大学院保健科学研究院教授(現職)

テーブルにあるのはヘルシンキの古書店で入手したバルト海の家図(1893年ロンドン刊、94年改訂)。10年後、ロシアのバルチック艦隊がこの海域を通過し、日本に向かった。エストニアもフィンランドも当時はロシア領で、東バルト海はロシアの内海であった。